

第一回留学報告書

留学先決定に至るまでの経緯

河野遥希

2021年6月30日

1 自己紹介

この秋からマサチューセッツ工科大学 (以下 MIT) の経済学部博士課程に進学予定の河野遥希と申します。ミクロ理論と計量経済学を専門にしています。東京大学経済学部を卒業後、同経済学研究科の統計学コースの修士課程を修了し、現在は博士1年に在籍しております。この統計学コースは、経済学研究科の下に設置されてはいるものの、他とは少し変わったコースです。例えば、統計学コースのコースワークは数理統計や確率論など、純粋な統計学に関するものが中心で、ミクロ・マクロ経済などの所謂普通の経済学の授業を取る必要はありません。現に、私も修士の間に経済学の授業を履修しませんでした。日本から、特に東大から経済学 Ph.D. に出願する際は、ミクロ・マクロの授業での好成績で経済学の基礎力をアピールすることが多いように思いますが、この点において、私のケースは少し一般的ではないので、もしこの報告書を今後の参考にされる方がいらっしゃいましたら、ご注意ください。

2 背景

具体的な出願プロセスの話に入る前に、私のバックグラウンドについて少しお話しします。

2.1 なぜ経済学か

私が経済学を学び始めたのは決して積極的な理由からではありませんでした。理系の東大志望だった高校3年生の私は、少しでも合格の可能性を高めようと思い、数学オリンピック予選通過というとても微妙な武器を手に、ちょうどその年から始まった東大の推薦入試の受験を決意しました。推薦入試では、科類ごとの受験である一般入試とは異なり、受験の段階で学部を決めなくてはなりません。私の興味は数学にあったので、理学部や工学部を受験するのが真っ当であった気がしますが、数学や物理がとんでもなくできる人たちに勝って、狭き門に滑り込むのは少し難しいだろうと考えました。どの学部を受験しようか迷っていたちょうどその頃、実は経済学がかなり高度な数学に基づいているらしいということを聞きかじりました。そこで、一般的に文系の学部とみなさ

れている経済学部であれば、自分の数学力が相対的に優位に働き、尚且つ入学後も、数学をたくさん使った経済理論の勉強・研究を楽しめるのではないかと思い、半ば戦略的に経済学部を受験し、幸運にも合格することができました。

こうして、私は経済学部への進学が決まった状態で入学しましたが、最初の頃は一般入試の学生と同じように文科Ⅱ類に割り振られました。したがって、必修の授業はほとんど文系向けの内容でした。高校時代から理系寄りの分野に興味のあった私は、案の定そうした授業にあまり興味が持たず、理系向けの数学の授業に潜ったり、同じサークルの理系の友人と自主ゼミをやっていたりと、まともに経済学に触れることはほとんどありませんでした。しかし、教養学部の2年間が終わり、いよいよ本格的に経済学の授業やゼミに参加するようになると、数学をベースにした経済学に触れることができ、ようやく経済学に興味を持ち始めました。また、確率論・統計学のゼミにも入り、そこで初めてヒストグラムを書く以上の統計学の世界にはじめて触れ、これはとても面白いと感じ、統計学の数理的な側面も勉強するようになりました。

2.2 なぜ研究者か

上述のように、大学入学当初は大して経済学自体への興味は持っておらず、卒業後は金融機関にでも就職しようかと思っていました。しかし、実際に勉強してみると、一見不思議な人間の行動を、数学とデータを用いて説明する経済学の営みに魅力を感じ、こういうことをずっとやっていられたらいいなと思うようになりました。それでも、研究者として大学に残れるのは本当に一握りの人だというイメージを持っていたため、具体的な将来像はなかなか描けずにいました。自分でも研究者として生きていけるかもしれないとわずかに自信を持てたのは、あとで詳しく述べるように、学部の4年生のときに少しか成果を出せた時です。この時にはじめて、研究者が日々やっていることの一部に触れ、これは確かに自分のやりたいことに一致しているなど改めて感じ、強く研究者を志すようになりました。

2.3 なぜ留学か

いざ経済学の分野で研究者になろうと思うと、海外、特にアメリカで Ph.D. を取るのはかなりスタンダードになりつつあります。もちろん、日本国内にも、東大をはじめとして世界中で高い評価を受けているプログラムはいくつもあります。留学先でたくさんのトップクラスの先生・学生に囲まれて研究することは、アカデミックな面でもコネクションの面でも、大きなアドバンテージになります。また、ノーベル経済学賞受賞者の大半はアメリカの研究機関に所属しているという事実を象徴されるように、経済学の研究の中心はアメリカであるため、アメリカでの Ph.D. 取得を目指すのは自然な選択でした。中でも、ミクロ理論や計量経済学の両方が強く、また、全体的に見ても、世界最高のプログラムの一つである MIT の経済学部は自分にとって理想的な場所だと考えました。

3 出願

続いて、出願に関して、私が実際に行ったこと、意識したことを述べます。

3.1 推薦状

Ph.D. 留学、特に経済学部への出願では、推薦状が最も大きな要素になります。私は、学部時代にゼミでお世話になった先生方3人に、修士論文の指導教員の先生を加えた4人をお願いしました。幸いにも皆さんに依頼を快諾していただき、合格の非常に大きな後押しになりました。これまでに何人も学生を留学に送り出されており、推薦状の書き方に関して精通されている先生方だったので、推薦状作成に関して私がやることは、リマインドぐらいしかありませんでした。

それ以前にも口頭で軽くお願いしたことはあった気がしますが、先生方に正式にお願いのメールを出したのは6/8でした。奨学金の応募にも推薦状が必要なので、少しお願いするのが遅くなってしまったなど反省しています。大体締め切りの1ヶ月前、1週間前ぐらいにリマインドしました。

ちなみに、出願の際に要求される推薦状は基本的に3通ですが、書いていただけるだけの関係にあった先生方全員をお願いしました。4通以上出せるところには4人全員をお願いしましたが、きっちり3通しか受け取らないところは、その大学ごとに、最もフィットすると思われる3人をお願いしました。

3.2 奨学金

色々なところに書いてありますが、日本国内で奨学金を獲得することのメリットは大きく2つあると思います。大学の予算を圧迫しないので、学業以外の理由で不合格になる可能性が低くなることと、自分が奨学金を獲得できる能力がある学生であることを示すシグナルになることです。したがって、巷ではアメリカのPh.D.は授業料を払わなくて良いどころか生活費がもらえると言われることが多いですが、そうであっても奨学金を持っていくに越したことはありません。

奨学金の応募には、自分のこれまでの実績や今後の研究計画を、分野外の人にも分かるようにまとめた書類を書くことが必要です。これは、出願本番でもSoPなどの項目で求められることですので、この時点で一度完成形を用意しておくことができれば、後々楽になるはずです。また、修士から出願する場合は、DC1の応募書類とかぶる項目も多いので、DC1への申請も真面目に準備しておく役立ちます。

特に意識したことは、どのような問題に対して、どのようなアプローチをとり、どのように解決するか、ということを簡潔に分かりやすく説明することです。選考委員の先生方のご専門と、自分の分野が完全にマッチすることはまずないので、はじめて自分の分野の文章を読む人にも伝わるように書くことが重要です。全然違う分野を研究している高校時代の友達に読んでもらうなどして、できるだけ理解が容易な文章になるように心がけました。

私は、船井、中島記念、村田、経団連、KDDIの5つの奨学金に応募しました。最初の2つからは合格を頂きました。残りの3つは途中辞退し、最終的に船井財団にお世話になることにしました。

3.3 TOEFL / GRE

TOEFLもGREも足切り以上の意味は持っていないと思います。特に、GREに関しては、コロナの関係もあって免除する大学も多く、尚更必要性を感じませんでした。TOEFLのセクション毎

の最低点を設けている大学もいくつかありますが、それがどれほど厳密に運用されているかは大学によりけりなようです。実際に、Yale は各セクション 25 点以上を課しており、私の Speaking のスコアはそれに全然到達していませんでしたが、合格できました。

まず、TOEFL については、英語の勉強自体あまり好きではないので、そんなに真面目に対策できませんでした。一応 Writing だけは、海外の添削サービスを 3 回ほど利用し、TOEFL 向けの型を覚えました。結果は 101 点 (R29 L26 S20 W26) で、典型的な日本人的な点数配分で最低ラインだけは越え、それ以上は手をつけませんでした。

GRE に至ってはもっと勉強しませんでした。Verbal は難しすぎ、Quantitative は簡単すぎたので全くモチベーションが湧きませんでした。Analytical Writing は、TOEFL の型をそのまま転用しました。結果は V150 Q170 AW4.0 で、やはり最低ラインちょうどという感じになりました。

3.4 CV

事実を淡々と書きました。それまでに書いた論文やもらった賞を並べてリストにしたぐらいで、あまり特別なことはしていません。

3.5 SoP

SoP は、耳にするアドバイスのボラティリティが最も大きい項目な気がします。ある人に聞くと、SoP は学生の熱意を見るところなので、自分のやりたい研究について情熱的に書くべきだと言われ、他の人に聞くと、自分の実績や興味について事実を淡々と述べればそれで良いと言われる、というようなことが往々にしてあります。私は後者の戦略を取りました。これまでに書いた論文について、それぞれ 1 パラグラフぐらいで説明したり、経験した RA のことや今後の研究方針などを、CV に書ききれなかったことを事実中心にまとめました。“Why Economics” “Research Experiences” “Qualifications” “Career Goal” “Research Interests” の 5 つの章に分けて書き、全部で約 1000 ワードになりました。最終的に、アメリカの大学でアドミッション担当のご経験がある先生をはじめとして、何人かに添削をお願いした後、英文校正に出してから提出しました。なお、希望する指導教員の名前を具体的に挙げるなどして、大学ごとに SoP を変えるかどうかよく議論になりますが、私は全ての大学で同じものを出しました。これは分野によりけりで、この先生じゃないとどうしても研究にならない、ということが経済学の場合はあまりないからだと思います。ただ、より短いワード数を指定してくる大学もあったので、その大学には別途要約版を作成して提出しました。

SoP のことは、留学を準備している人向けの資料やサイトであればどこにでも書いてあることなので良いのですが、UC 系列を中心に、Personal History Statement なる別のエッセイを追加で課されることがあります。これは、大学のコミュニティの多様性にどのように貢献できるかを述べよというもので、ずっと東京で育ち、大した海外経験もない私のような人にはかなり書きにくいものでした。これの存在に気付いたのは締め切りギリギリで、慌てて急ごしらえのエッセイをでっち上げ、英文校正も通さずに提出しました。結果的に合否に影響することはなかったようですが、もう少し早めに調べて準備しておくべきでした。

3.6 研究業績

Writing sample として出願書類に含めた論文は3本です。1つ目は、中央銀行と市場のコミュニケーションをテーマにした学部の卒業論文で、2つ目は、多変量線形回帰モデルに対する情報量規準についての修士論文のドラフトです。これらの研究も出して損になるような出来ではありませんでした(と信じたい)が、最後のひとつで他の出願者と強く差別化を図ることができ、また先生方に書いていただいた推薦状を多少なりとも強くできたと考えているので、それを中心に述べます。

学部4年の5月頃に、所属していたゲーム理論を扱うゼミで、ある論文の発表担当になりました。その論文は、現在ではチープトークと呼ばれる経済学の重要なモデルの発端となった論文で、理論経済学では最も権威のある *Econometrica* という雑誌に掲載され、その後たくさんの研究から引用されていました。私は、この論文を経済学的にも数学的にも面白そうだと思い、ゴールデンウィークを全部使って丁寧に読み込みました。ところが、主定理の証明の中のとある行間をどうしても埋めることができませんでした。仕方がないので、その部分を迂回する形で、論文とは別の証明を考え、発表当日にその旨を話しました。すると、先生も同じ箇所を気にされており、議論の結果、どうやら論文の記述は間違っていて、反例が構成できそうだという結論に至りました。最終的に、先生の反例と私の別証明を合わせて、訂正論文を書き、それが元の雑誌である *Econometrica* に掲載されました。もちろん、これは訂正論文なので、オリジナルの論文と同じ重みで評価されることはないとは言え、出願時点で論文が出版されていることも滅多にない経済学部のアドミッションにおいて、受理された論文が1本あること、そしてそれがトップの雑誌に載ったことで、私の出願書類をかなり強化してくれる成果になりました。このプロジェクトがうまくいったことで、研究者として生きていくことや海外のトップスクールへ留学することが現実味を帯びてきたこともあり、大変思い入れ深いものになりました。

4 結果とその後

全部で11プログラム(MIT / Harvard / Stanford (Econ) / Stanford (GSB) / Yale / Princeton / UC Berkeley / Northwestern / Chicago / UCLA / Columbia)に出願し、8プログラム(MIT / Harvard / Stanford (Econ) / Stanford (GSB) / Yale / Princeton / UC Berkeley / Northwestern)から合格をいただきました。経済学部では一般的なことなのかもしれませんが、合否審査のための面接は実質的にはありませんでした。唯一Columbiaとだけ、計量経済の有名な先生との面接が設定されましたが、中身は合格を出したら来るかどうか、という内容でした。その時すでにMITをはじめとして、Columbiaを強支配する大学からいくつか合格をもらっていたので、おそらくColumbiaに行くことはないだろうと正直に話したところ、「例年なら合格させるが、今年はコロナの影響で予算を縮小しているから合格を出せない、またジョブマーケットで会おう」と言われました。真に受けて、5年後の就活を楽しみに待つことにします。

さて、一旦合格が出ると、今度は一転してミーティングを設定しようと、各大学の先生やルート担当の学生から大量のメールが届くようになりました。あまり行く気がなかった大学の人

ともたくさん話し、進学先の決定に当たって何を重視すべきかなど色々教えてもらいました。もとの第一志望だった MIT から合格をもらった時点で、MIT に決めたつもりでいたのですが、Harvard がものすごく熱心に勧誘してくれたので、非常に迷いました。それでも、これまでお世話になった先生方とも相談した結果、やはり MIT が自分の興味に最もフィットするだろうと判断し、最終的に MIT への進学を決めました。ちなみに、大学から出る奨学金は Harvard の方が断然良かったので、MIT にそのことを相談したら、少し上乘せしてくれました。複数の大学に合格できた場合は、多少なりとも奨学金交渉をすると良いのかもしれませんが。

5 最後に

海外大学院への出願は運によるところが大きいとよく言われます。確かに、研究室単位で学生を採用するような理系の学部の場合、同じ年にとんでもなくできる人が1人いるだけで、希望する研究室に入れないうちに、自分ではどうしようもないことが起こる可能性が高い気がする。蓋を開けてみるまで分からないという主張にも肯けます。しかし、学年ごとにざっくりと20~30人を受け入れる経済学部の場合は、出願時点である程度合否の予測がつくことが多いと思います。つまり、指導教員の推薦状の内容や過去の研究成果がしっかりしていれば、多少の分野のミスマッチなどによる不合格はあるにせよ、どこかしら良い大学には受かる可能性は高いのではないかと思います。コネクションや SoP、各種テストでどうこうという世界ではあまりありません。したがって、普段の授業やゼミでひとつひとつのテーマに真摯に取り組んで発表することや、卒業論文や修士論文を可能な限り良いものに仕上げることが重要だと思います。また、それについて先生や周りの学生と議論できる環境があると理想的です。自分はどういう問題意識を持って研究に取り組んでいて、どういうところで困難に直面しているのかということ、色々な人と共有することで、必要な情報やアイデアは自然に集まってきます。こうした本質的なメリットに加えて、留学への直接的なつながり而言えば、その試行錯誤の様子を普段から先生に見せておくことは、後に、鮮明で具体的な推薦状を書いてもらえることにもつながります。もちろん、授業の成績などが十分に良い前提ですが。

ただ、そうは言っても、運が絡むこともあります。私の場合、もし学部や修士でいい先生に巡り会っていなかったら、もしくは、もし担当した論文に間違いがなかったら、研究者を目指していたかも、海外 Ph.D. に挑戦していたかも分かりません。運に恵まれるかどうかはある意味で仕方のないことですが、その「たまたま」に出会える確率を上げることはできると思います。あまり真面目に読まなくてもやり過ごせるような課題でも、他人より深く論文を読んでも、誰も気付いていない間違いが見つかるかもしれない。同じテーマに興味がある学生同士でゼミを開けば、みんなで考えたことが論文になるかもしれない。研究する機会がない学部生でも、興味のある分野の先生に連絡をとってみると、思いの外丁寧なサポートが受けられて、面白い研究が開始できるかもしれない。このように、自ら行動を起こすことで、事後的に見たらラッキーとしか思えないことでも、それに遭遇する可能性を高めることができます。現在世界中で華々しい活躍をされている先輩方の話を聞いていても、自らの行動で必然的にチャンスに巡り合い、それを自分の努力で成果に変えてこ

られた方ばかりであるように思います。

末筆にはなりましたが、第一志望の大学に合格し、また、金銭的な心配を全くせずに留学を開始することができるのは、単に船井財団の皆様のおかげです。この場を借りて御礼申し上げます。栄えある船井財団の名に恥じぬよう、そして、必然の「たまたま」にたくさん遭遇しながらそれらを逃さぬよう、日々精進を重ねていく所存ですので、今後ともどうぞよろしく願いいたします。